

ぐきつかけの場」づくりとして仁藤さんがたちあげた自立支援事業 CoLab を必要とする少女たちが後を絶たないことを見ても、日本の子どもたちの「難民化」「放課後難民」問題は、社会の歪み・子どもの貧困の縮図といえよう。

二. 日本の子どもたちの失業——心の居場所を失う子どもたち

子どもの「難民化」問題の本質はどこにあるのか。それは、子育て力や親子関係の歯車が狂った特別な家庭の問題ではない。学校・家庭・地域社会で自分の存在感・必要感を噛み締めることができず、自分の役割を失った子どもたち、いわば失業状態の子どもたちの自己有用感・自己肯定感の喪失の問題にある。いま日本の子どもたちが抱える居場所のなさ（「心の安心」「心の拠り所」の喪失）は、日々の生活の中に自分の役割がなく、自信が持てず、孤独感を抱いているということから生じている。

二〇〇七年にユニセフが発表した「子どもの幸福度調査」で、世界の先進諸国の中で「自分は孤独だ」と感じている子ども（十五歳児）の割合が、日本は群を抜いて高い（29・8%）ことが話題になった（平均は7・4%）。子どもの孤独感の高さは、「自己肯定感の低さ」（二〇一一年財団法人日本青少年研究所の米・中・韓・日四カ国比較調査の結果より。「私は価値のある人間だと思う」への回答

「全くそう思う」の割合が、米国157・2%、中国142・2%、韓国120・2に対して、日本17・5%）と相まって、子どもの幸福感や生きる力を低めていると思われる。

子どもNPOセンター福岡が、幸福度世界一といわれるデンマークの子ども約二〇〇人と同じ年代の福岡の子どもを調査し比較した興味深い結果がある。それによると「自分のことが好きだ」（福岡40%、デンマーク95%）、「自分からは人から必要とされている」（福岡43%、デンマーク89%）、「自分にはいいところがたくさんある」（福岡37%、デンマーク87%）、「自分は役に立つ人間だ」（福岡33%、デンマーク94%）、「社会の役に立つことがしたい」（福岡82%、デンマーク88%）というような結果になったという。「社会の役に立つことがしたい」という項目には、あまり大きな開きがないのに、日本の子どもたちの自尊心の低さ、自信のなさの数値の低さが目立つ。

今日の日本の子育て・教育で問題なのは、子どもたちは守られ、サービスを与えられる存在ではあっても、「あてにされる」存在でなくなったことである。自尊心や自己肯定感が育たないのは、幼いながらも、役割と出番をもち、あてにされ、信頼される機会がないからではないか。家庭と地域社会の生活のなかに出番と役割が失われた子どもたちは、いわば「失業」状態に置かれている。失業者が居場所を失うと、たちどころに「難民化」してしまう大人の貧